

西宮市幼児教育・保育ビジョン（仮称）
ワーキングチーム中間報告

令和3年2月16日
西宮市政策局

目 次

	頁
はじめに	1
I 西宮市の幼児教育・保育が目指すもの	2
II 見守り・支えるを大切にする幼児教育・保育	3
1 みつけて・ためして、たっぷり遊ぼう	3
(1)「遊び」を通した学びの大切さについて	3
(2)「遊び」に必要なこと	4
① たっぷり遊べる環境をつくる	4
ア 安全・安心な環境	
イ 子どもに寄り添った環境	
② 「遊び」を見守り・支える	5
2 ゆっくり・じっくり、親子になろう	6
① 保護者の思いを受け止め寄り添う	6
② 保護者と子どもの気持ちを結ぶ	6
③ 地域とつながる	7
III 子どもと保護者を見守り・支えるための力の向上	8
① 明日につなげる1日の振返り	8
② 研修の充実などによる資質の向上	8
ア 資質の向上	
イ 保育者の意識向上	

はじめに

乳幼児期は、子どもが自分を大切に思える感情（自己肯定感や自尊感情）を持つなど、生涯を通じての「根っこ」をつくる上でとても大切な時期です。また、近年、乳幼児期に受けた教育や保育が、学校に入ってから学力や運動能力、さらには大人になってからの生活にも大きく影響していることを示す研究成果も発表されています。

このように乳幼児期は、子どものこれからの人生に大きな影響を与える大切な時期だからこそ、通っている園や施設の種類、障害の有無や家庭の状況などに関わらず、すべての子どもが質の高い幼児教育・保育を受けられることが大切です。

加えて、これからは人口減少やAIの発達の影響などから社会がどのように変化していくのか分からない時代だと言われています。このような時代に必要な力は、自ら考え行動し、新たなものを創造できる力です。こういった力の基礎は、乳幼児期の環境を通じた教育・保育の中で育まれることから、その重要性はさらに高まっています。

幼稚園教育要領、保育所保育指針及び幼保連携型認定こども園教育・保育要領は、幼児教育・保育の根本的な部分を共通に捉え、法令上はどの施設に通う子どもでも適切な幼児教育・保育が受けられるようになっています。しかし、幼児教育・保育に携わる園や施設が増加・多様化するなか、要領・指針をどのように解釈し、どのような幼児教育・保育を行うのかは、園や施設に委ねられています。

そこで、それぞれの園や施設の個性は尊重しつつ、西宮市で行われる幼児教育・保育で大切にすべきことを共有し、質の高い幼児教育・保育のために必要な取組を示そうと、市内の私立と公立の幼稚園と保育所のそれぞれの代表者、小学校関係者及び学識者が議論を重ね、さらに、幼児教育・保育の現場で実際に子どもに携わっている幼稚園教諭、保育士及び保育教諭による意見交換の結果も踏まえ、「西宮市幼児教育・保育ビジョン」を策定しました。子どもの育ちをより良いものにするため、西宮で幼児教育・保育に携わる全ての方がご活用くださるようお願いいたします。

I 西宮市の幼児教育・保育が目指すもの

乳幼児期の教育・保育は、子どもたちが自分自身を大切にする気持ちなどを育み生涯を通じた「根っこ」を形作るうえで非常に大切な意味をもっています。

すべての子どもが、乳幼児期にふさわしい環境の中で育つことができるよう「見守り」「支える」を大切にします。

「見守り」「支える」を基本に

みつけて・ためして、たっぷり遊ぼう
（「遊び」を大切にする教育・保育の実施）

ゆっくり・じっくり、親子になろう
（「親子で一緒に育つ」をめざす保護者支援）

の幼児教育・保育を目指します。

Ⅱ 見守り・支えるを大切にする幼児教育・保育

1 みつけて・ためして、たっぷり遊ぼう

(1) 「遊び」を通した学びの大切さについて

乳幼児期は、小学校などの教科書を使った学習とは異なり、生活の中で興味や感じたことをきっかけに、見る・触る・嗅ぐなどの五感を使った体験を通して、身体で学ぶ時期です。この時期の子どもは、「遊び」を通していろいろな物や人と関わり、感じたり、考えたり、何かをみつけようとしたりしながら、自分の周りの世界の中から様々なことを学んでいきます。

【「遊び」って何？】

- ・楽しくて面白いこと。
- ・自ら進んで「やってみよう」と思うもの。
- ・自分の発想やアイデアを試せるもの。
- ・夢中になって遊び込めるもの。

このころの子どもが遊んでいる様子を見てみると「遊び」の中でうまくできず、どうしたらできるだろうと考え込んでいるかと思うと、今度は同じことを何度も試してみたり、大人から見るといつまで続けるの？と思うくらい繰り返したりします。何故でしょう。

それは、「遊び」が、遊びだからこそ楽しくて他ならないからです。楽しいからこそ、うまくいなくても興味が深まり「もう1回！」と何度もチャレンジし、たまに手を止め「何でだろう？」と考え、自分の思いや考えを試しながら子どもは成長していきます。

幼稚園、保育所、認定こども園などにおける集団保育では、子どもは保育者に見守られ、支えられながら、子ども同士と一緒に遊ぶことを通して、互いに協力しようとする力が芽生えます。そして友達がいるからこそ「やってみよう！」と一人ではできそうもないことに取り組むことができます。そして、友達との協力や話し合い、アイデアを出し合うことなどを通じて、友達との関わり方も学びながら、できなかったことができるようになっていきます。

乳幼児期の子どもは、こうやって「遊び」を起点にして「目標に向かって頑張る力」「人とうまく関わる力」「感情のコントロール」など生涯を通して基礎となる数値で測れない内面の力を身に付けていきます。それが小学校や中学校などでの学習への意欲にも繋がっていきます。

(2) 「遊び」に必要なこと

「遊び」の中から様々なことを学ぶ幼児教育・保育では、大切なことは沢山ありますが、中でもまわりと関わりながら「たっぷり遊べる環境をつくる」と、「遊び」がよりよく展開・発展するよう「見守り、支える」ことが重要です。

① たっぴり遊べる環境をつくる

ア 安全・安心な環境

子どもの心は周囲の環境にとっても敏感です。保育者が、子どもの発達を理解し、危険や不安のない「安全」な環境を整えることで、子どもは「やってみよう」と思う「遊び」を見つけ、自分のアイデアを試すことができます。

子どもが「遊び」に入り込むには、「いざという時に助けてくれる」「失敗しても支えてくれる」という「安心」できる環境も必要です。

この安全・安心な環境の基本は、保育者と子どもとの間が愛情のこもった信頼関係で結ばれていることです。この信頼関係は、日頃から保育者が一人ひとりの子どもの心にまで目を向け、遊んでいる時に「面白いね。」や「どうなるのかな？」など子どもに共感する関わりをすることなどの中から育まれていきます。

また、同時に子どもには、「先生が見てくれている嬉しい。」という気持ちになります。このような気持ちの積み重ねが自己肯定感につながっていきます。

イ 子どもに寄り添った環境

子どもは、心も体もそれぞれのペースで日々成長しています。また、興味の対象もそれぞれで、保育者は担当する子どもを理解した上で、発達に合わせた環境を用意することが必要となります。

保育者は、子どもの興味や関心から「遊び」の環境を設定し、「遊び」に必要な物を考え、作り、使って遊ぶことで、より「遊び」の面白さを感じさせることが大切です。

時には、季節を感じるために近くの公園へどんぐりを拾いに行く計画をして「昨日、拾ったどんぐりで遊んでみよう。子供たちはどんな遊びを考えるかな。」「アオムシを興味津々に見てたから、チョウチョウの図鑑や絵本を用意しよう。」など子どもの興味や関心に思いを巡らせ、意図的に環境を設定することも大切です。

園外保育、特に自然の中に出かけていくと、動物や植物などを見たり触ったりすることで新たな発見をしたり、大きな空や海のおいを嗅いで心が揺さぶられたりするなど、子どもの経験をより豊かなものにしていきます。そして、それぞれの子どもが感じたことを、「トンボが飛んでたよ！」「お花がいっぱい咲いてた！」「おっきな船を見た！」と言葉にして友達と保育者と共有したり、「遠足で見た鳥を作った」など自分なりの豊かな表現をしたりするようになります。

【西宮の自然で遊ぶ】

西宮市は、阪神地域という日本有数の都市部に位置していますが、甲山など六甲山系の緑の山並み、武庫川・夙川などの美しい河川、大阪湾に残された貴重な甲子園浜・香櫨園浜をはじめとした豊かな自然が残っています。

自然は、子どもたちにとって生きた百科事典のようなものです。ダンゴムシを捕まえたり、タンポポの綿毛を飛ばしたり・・・etc、見て・触って・嗅ぐなど五感をフルに使って、実体験を通じて豊かな経験を得ることができます。

安全には気を付けて、この貴重な環境を十分に活用しましょう。

② 「遊び」を見守り・支える

子どもの成長を見るとき、「縄跳びができた。」「字が書けた。」などの成果に目が行きがちですが、結果ではなく、「遊び」の経過を重視し、子どもは自分のペースで日々成長をしていることを忘れてはいけません。

子どもは、「遊び」を通して友達と協力すること、折り合いを付けることなど様々なことを学んでいます。学んだことはすべて経験値として子どもの中に蓄えられています。こうした積み重ねた経験値は、友達とのトラブルなどが起きた時に「考える力」となりトラブルを上手に解決してみせ、大人たちを驚かすことがあります。

保育者は、このような子どもの力を引き出すため、まず子どもの成長・発達の「道すじ」を理解しておくことが必要です。その上で、発達に合わせた環境を用意し、子どもが「遊び」の中で何を楽しみ、何を面白いと感じているかなど一人ひとりの成長の理解に努めながら「見守る」ことが大切です。

そして、子どもが、「遊び」がうまくいかず途中で停滞している場合には、保育者はできる限り子どもの興味・関心が続くように「どうしたのかな?」「どうしたいのかな?」など声を掛けたり、「これは何?」「これはどうかな?」などとヒントを与えたりしながら、最後までやり抜けるよう「支える」ことが必要です。

ここで大切なことは、「見守り」があって、「支える」がセットになっていることです。

2 ゆっくり・じっくり、親子になろう

子育てとは、これまでの生活スタイルを変え、そこに積極的な喜びを見出していくことが求められる営みです。人は、子どもが生まれたときから親になる準備が始まり、様々な経験を積み重ねながら、実際に子どもを育てることによって親になっていきます。

また、人は、何世代にもわたり、祖父母や親戚、さらには地域の人々が子育てを支えてきましたが、いまでは少子化、核家族化、又は地域コミュニティの煩わしさなどから、周囲に頼らず、インターネットや育児書に頼った子育てをしている人が見られます。このように現代の多くの人にとって子育ては難しいものになっているのが現状です。しかし、子育てに周囲の支えが必要なことはいまでも変わりありません。

このようなことから、改めて保育者には、子どもの育ちをより良いものにするため、保護者が親になっていくプロセスを支える役割が強く求められています。

そこでまず、保育者は、保護者に対して「一人で親になれないから、子育ては周囲に助けてもらって良いんだよ。」というメッセージを伝えることが大切です。そして、幼稚園、保育所、認定こども園などが保護者の思いを受け止め、安心できる場として、気軽に悩みを相談し助言を受けたり、他の保護者と繋がれる場になることができれば、保護者にとって大きな力となります。

① 保護者の思いを受け止め寄り添う

子育てについて、誰にも相談することができない保護者は、保育者にアドバイス以上にコミュニケーションを求めていることもあります。保育者は、まず保護者がどんな状況に置かれ、どんな思いを抱いているかを引き出し、その状況を受け止めることが大切です。解決策が見えなくても寄り添ってくれる伴走者がいることが大きな支えになります。

【支援の事例】

- ・ 保育者が気になる保護者に直接声を掛けることその他、保護者支援を担当する保育者による保護者と交流の場（懇談会のような固いものでなく、柔らかい雰囲気）を設ける。
- ・ 保護者のサークル活動など保護者グループに保育者が仲介を行う。
- ・ 養護教諭、保健師など専門職による相談の実施

② 保護者と子どもの気持ちを結ぶ

子育ては、子どもの思いを感じ取り、それを受け止めるところから始まります。保護者の目が子どもの心に向くように、保護者と一緒に「子どもはどんな気持ちか」と考えることで、我が子を愛おしく思う保護者の愛情が深まるようサポートすることが大切です。

【支援の事例】

- ・ 保育参加後に保護者同士でグループ・ディスカッションを行うことで子

どもの育ちの理解促進を図る。

- ・ 保育の様子を紹介したドキュメンテーションによる情報提供を行う。
- ・ 保育者を体験する「保育参加」を通じた愛着促進を図る。

③ 地域とつながる

子どもについての専門職集団である幼稚園、保育所、認定こども園などの大半は、園庭開放や体験保育など様々な未就園児向けの活動を行っており、地域の子育て支援を担う施設としても重要な役割が期待されます。

なお、児童虐待など園だけで対応が難しい事例を発見等した場合には、早急に行政の専門機関に繋ぎましょう。

【支援の事例】

- ・ 園庭開放、体験保育や一時預かり事業、あるいは子育てひろば事業など未就園児を対象にした事業に積極的に取り組み、来園する保護者が育児不安などを抱えていないかなど目配し、積極的に声をかける。
- ・ 日頃から地区青少年愛護協議会や民生・児童委員とも連携し、気に係る親子などに園庭開放等を利用するよう声掛けを依頼する。

Ⅲ 子どもと保護者を見守り・支えるための力の向上

一人ひとりの保育者が、子どもと保護者を見守り・支える力を向上させ、幼児教育・保育がより良いものになるよう「明日につなげる 1日の振返り」を行うことや、研修の充実などによる「資質の向上」が必要です。

① 明日につなげる 1日の振返り

保育者の仕事は、子ども一人ひとりの理解を深めるためアセスメントすることから始まり、保育計画を立て、実践し、それを振り返り、改善するPDCAサイクルになっています。

振り返る方法としては、1日の保育が終われば「記録を付ける」ことや、保育者同士が休憩時間などに子どもの様子や些細なできごとなど「子どものことを話す」ことなどがあります。

いずれにしても、保育を振り返ることで、保育中には気付かなかった子どもの姿や言葉、保育者自身の関わり方の良かったところ、工夫が必要だったところに気づき、次の日の保育へつなげることができます。振返りをルーティンとすることで、保育者は保育の引出しを増やし、その質を高めていくことができます。

② 研修の充実などによる資質の向上

幼児教育・保育の現場には、小学校などのように教科書が用意されていません。保育者が、子どもの育ちを支える存在であり、子どもに大きな影響を与える環境の一つとして重要な役割を担っています。このため、保育者は常に資質能力や技術を磨き、その専門性を向上させていくことが求められています。

ア 資質の向上

保育の質を向上させるためには、さまざまな機会を活用して、保育者がその資質を高めていけるようにしていくことが必要です。

そのためには、OJT（日々の保育やスーパーバイズなどを通じた学び）、Off-JT（園内研修・外部の研修などへの参加を通じた学び）、SDS（自己研鑽による学び）をうまく組み合わせていくことが大切です。

また、園長や設置者が、園内研修の実施や外部の研修が受講しやすい環境を整えることで、保育者はその資質を高めることができ、よりよい保育につながります。併せて、園長や設置者が保育について自己研鑽することが大切です。

イ 保育者の意識向上

このビジョンを通して、西宮市では「子どもを中心とした保育」の実現を目指します。このため、すべての保育者が同じ意識を持ち、保育にあたることができるよう、市内の保育者が交流し、子どもの育ちについて意見を交わし、お互いを高めていく場を作ります。